BAUDELAIRE の〈spleen〉の由来

南　　直　　樹*

はじめに

BAUDELAIRE における主要な基本的主題は、« Les Fleurs du Mal » の最初にして最大の章の表題〈Spleen et Idéal〉が示すように、「憂鬱と理想」である。この et は対立と緊張の意を示すものである。spleen は「詩人の現実生活における精神的・生理的状態を要約する語」[1] であり、「その悲惨な状態から脱出しようする希求を表す語「理想」を対置して」[2]、詩人の実存的状況と夢を表明しようとしている。

BAUDELARE は、その後半生（といっても 30 歳頃からだが)、不摂生に負ういくらかの体調の不良に加えて、現代医学にとって親しい慢性の抑鬱状態（デプレション）に苦しんでいた。この苦悶は、普通の人が一般に恐れる暗闇・空虚・不慮の事故などとは違って、はっきりとした対象のない漠然とした恐怖から発する憂鬱であり、苦悩する人である BAUDELAIRE はいたるところに、非限定的な危険や脅威を見出す。詩篇 *Correspondances* では「〈自然〉はひとつの神殿」であり、「その生命（いのち）ある柱は、時おり、曖昧な言葉を洩ら」し、その「象徴の森を過（よぎ）る」詩人を「親しい眼差しで」見守ってくれていた。しかし *Obsession* というソネのなかでは、詩人は自然全体を前にしてその戦慄（おののき）と不安を表明する。

---

* 福岡大学人文学部教授

Grands bois, vous m'effrayez comme des cathédrales;
Vous hurlez comme l'orgue; et dans nos cœurs maudits,
Chambres d'éternel deuil où vibrent de vieux râles,
4 Répondent les échos de vos *De profundis*.[3]

「大きな森よ、きみは大伽藍(カテドラル)のように私を怯(おび)えさえる。きみは大風琴(オルグ)のように咆哮する。われらの呪われた心、古い臨終(いまわ)の喘ぎの顫(ふる)え続ける、この永遠の喪の寝室の中に、きみの唱える「深キ淵ヨリ(デ・プロフンデイス)」の木霊(こだま)が響く」(v.1-4)。また、パリに生まれパリに生きた詩人である BAUDELAIRE にとって、パリは「蟻のように人間のうごめく都市、夢に満ちた都市」[4] であり、パリの群衆は「奇跡的なエネルギーの源、巨大な《電力発電所》」[5]（J.-P. RICHARD）でありながら、その spleen ゆえに詩人に恐ろしい真の幻覚(アリュシナシオン)を生じさせるものに変貌しさえする。「群衆の人である BAUDELAIRE は、最も群衆を恐れる人でもある」[6] と J.-P. SARTRE は指摘しているが、*Les Sept Vieillards* において、詩人はパリの通りに「地獄めく行列」を形作る、「醜悪な怪物」とみえる同一の 7 人の老人との（想像上の？）出会いを経験する。そして詩人は恐怖のあまり、その場から家に逃げ帰るということが起こる。

Exaspéré comme un ivrogne qui voit double,
Je rentrai, je fermai ma porte, épouvanté,
Malade et malfondu, l'esprit fiévreux et troublé,
48 Blessé par le mystère et par l'absurdité!

Vainement ma raison voulait prendre la barre;
La tempête en jouant déroutait ses efforts,

Et mon âme dansait, dansait, vieille gabarre
52 Sans mâts, sur une mer monstrueuse et sans bords[7]!

「物が二重に見える酔いどれのように苛立って、私は家に帰り、扉を閉めた、おそれ戦き、病に憑かれ、身は凍え、精神は熱に浮かされ乱れ、この不条理に、傷つけられて！私の理性は空しく舵をとろうとした。嵐は、戯れに、その努力の邪魔をする、そして私の魂は、帆柱もない古い川船、岸もない魔性の海の上に、踊り、踊った」(v.45-52)。J.-D. Hubert は「この老人はパリの魂であると同時に、詩人の完全な無力の象徴である」[8] と評しているが、明らかに詩人の精神は幻覚によって鬱屈し、錯乱している。

筆者はこれまで「BAUDEALAIRE の〈spleen〉の形象」と題して、「空間篇」[9]・「時間篇」[10] の二度に渡って、主に韻文詩集 « Les Fleurs du Mal » と散文詩集 « Le Spleen de Paris » に現れる BAUDELAIRE の spleen のイマージュを分析、記述してきた。その結果それは、空間については閉塞空間、すなわち孤独な部屋、蓋する空、牢獄、墓穴の、時間については、時間の不動化、凋落の季節、悔恨、眠りのイマージュとして表現されることを示した。両方の場合、人間の生命の有限を識る BAUDELAIRE にあっては、その最後には死すべき運命の思念に到達する。

今回はそれらを補い、まとめるものとして、BAUDELAIRE がその生においてなぜかくも深い憂鬱に捕らえられないといけないのか、その形而上学的そして現実的な理由を、その由来するところを考察してみたいと思う。

I

なぜ BAUDELAIRE がその人生において憂鬱に捕らえられるかといえば、それは詩人の生がその誕生そのものからこの地上において不幸であるように断罪

されているからである。« Les Fleurs du Mal » の最初の章の最初の詩である *Bénédiction* において、詩人は「呪われた者」として生まれたことが宣せられる。bénédiction は、神の与え給う「祝福」、「恵み」と詩人の側からの「感謝の言葉」を意味するが、その反意語 malédiction、すなわち「呪われた者」が神や運命に投げ返す呪詛を、詩人を生んだ母親自身が吐く。「至高の力の命ずるところによって、〈詩人〉が、倦怠に悩むこの世に現れ出る時、その母親は恐れ慄き冒瀆を胸に湛えて、拳をわなわなと震わせ、哀れみ給う神に向かって」[11]（v.1-4）次のような呪いの言葉を投げかける。

—— « Ah! que n'ai-je mis bas tout un nœud de vipères
Plutôt que de nourrir cette dérision!
Maudit soit la nuit aux plaisirs éphémères
8 Où mon ventre a conçu mon expiation !

« Puisque tu m'as choisie entre toutes les femmes
Pour être le dégout de mon triste mari,
Et que je ne puis pas rejeter dans les flammes,
12 Comme un billet d'amour, ce monstre rabougri,

« Je ferai rejaillir ta haine qui m'accable
Sur l'instrument maudit de tes méchancetés,
Et je tordrai si bien cet arbre misérable,
16 Qu'il ne pourra pousser ses boutons empestés ! »[12]

「——ああ！なにゆえ蝮のひと塊を産み落とさなかったのでしょう、こんな嘲りのものを育てるほどなら！私の腹が、この身の贖いの種を孕んだはかない

快楽（けらく）の夜こそ、呪われてあれ！」(v.5-8)。赤子の詩人を「贖いの種」と呼ぶのは、「この呪われた子ゆえ私は苦しむ、苦しみによって私の罪はあがなわれる、という考え」[13]（阿部良雄）を意味する。ここでは詩人すなわち預言者を生んだがゆえに苦しむ母親の悲劇的な役割が、グロテスクに描き出されている。「私の哀れな夫の嫌悪の的とするため、御身があらゆる女の中から私を選んだのだから、そしてこのひねびた怪物を、恋文さながら、炎の中へ投げ込むわけにはいかないのだから」(v.9-12)。J.-D. HUBERT の注釈によれば、ここの場面は聖書の、神がマリアをあらゆる女の中から選んで聖霊の訪れるところとなし給うたことのパロディであるという。「母親の反応は、受胎告知の際の聖処女マリアのそれと絶対的に対立する、というのは彼女は瀆聖するばかりであるから」[14]。「あなたが悪意からお用いの、この呪わしい道具の上に、私を苛（さいな）むあなたの憎しみを跳び返らせて、この惨めな樹木を思いのまま捻じ曲げ、悪臭放つその新芽を出せなくしてやりましょう！」(v.13-16)。神が女に抱く悪意については『創世記』三 16[15]に記されているが、「神の悪意が女を苦しめる「道具」に子供を用いるのである」[16]（阿部良雄）。「母親はかくて己が憎しみの泡を飲み下し、永遠なる御心の分からぬまま、われとわが手でゲヘナの谷の奥深く、母親の罪を処罰すべき火刑台を準備する」[17] (v.17-20)。ゲヘナの谷とは、『イエレミア記』七 31 に出る「エルサレム近く、人見御供を焼いたベンヒンノムの谷のラテン名」のことであり、「ここでは「地獄」の意」[18] である。こうして詩人は「呪われた者」であり、母親の呪詛の言葉でそれが表明されている。ここに BAUDELAIRE の、遂に終生彼のことを受け入れることのなかった現実の母親、「詩人の生活というものが何であるかひどく無知で」[19] あった AUPICK 夫人への冷（さ）めた感情を読み取ることも可能である。BAUDELAIRE の母親に対する屈折した感情・思いは、彼の晩年（ブリュッセル。1865 年 12 月 23 日、土曜）に書かれた次のような手紙がそれをよく表しているだろう。

僕が嘆きの種とする不運に関しては（そして僕はもしできるならばその復讐をするでしょうが）、愛しい小さなお母さん、ご意見に従うことはできません、お母さんに対する敬意のすべてにもかかわらず、僕は自分の悪徳を知っていますし、自分の過誤も、自分の法懦（きょうだ）も、お母さんと同じ位よく知っています。自分の咎（とが）は進んで大きく見るでしょうが、そうしたことのすべてにかかわらず、パリはかつて僕に対して正当でであったことはないと、主張するのです、――かつて、敬意においても、金銭においても、**僕に帰すべきもの**を払ってもらったためしはない、と。そして、僕の頭上に一種の不運が吊り下がってることの最上の証明は、僕の母親その人が、いろんな状況において、僕に立ち向かってくるということです。[20]

しかしこの「見捨てられた〈子供〉」は「ひとりの〈天使〉の目に見えぬ後見のもと」、「太陽に酔い、その飲むものはことごとく紅色（くれない）の神酒（みき）となり、その食うものはことごとく香り高い神饌（みけ）となる」[21]（v.21-24）。「見捨てられた」は直訳すれば、「相続権を奪われた」、「廃嫡された」の意であり、「詩人は常人とは異なる使命を授かっているためかえつて近親からも疎んじられるという発想は、ロマン派詩人一般に共通である」[22]（阿部良雄）。「神酒」や「神饌」は不死を保障するオリュンポスの神々の飲料、食物である。こうして詩人は「風と戯れ、雲とは言葉を交わし、歌を口ずさみつつ、十字架の道に酔う。その巡礼を見守りつつ行く〈聖霊〉も、森の小鳥のように快活な姿を見ては涙ぐむ」[23]（v. 25-28）。「――人生の上に天翔り、花々や口きかぬ物たちの言語を苦もなく解する者」[24]（*Élévation*）である詩人の歩む道は、キリストのそれに似た苦難に満ちた「十字架の道」に他ならない。

母親の呪いの次には、詩人は彼の妻の反抗と殺戮（さつりく）行為に晒（さら）される。彼女は、「私のことを、礼拝したいほど美しいと思っているのだから、古代の偶像の役目を務めましょう、そして偶像のように、身を金箔で飾らせましょう」[25]

（v.39-40）と古代の異教の崇拝を露(あらわ)にし、さらに「私はほしいままに、香油を、薫香を、没薬(もつやく)を、跪(ひざまず)いて礼拝を、肉を、葡萄酒を貪りましょう。それは知るためなのです、私を賛美するこの男の心から、神に向けられるべき崇拝を、笑いながら、掠め取れるかどうかを」[26]（v.41-44）と詩人の信仰を否定した上に、詩人の心臓を抉(えぐ)り取ろうとさえする。

« Et, quand je m'ennuierai de ces farces impies,
Je poserai sur lui ma frêle et forte main;
Et mes ongles, pareils aux ongles des harpies,
48 Sauront jusqu'à son cœur se frayer un chemin.

« Comme un tout jeune oiseau qui tremble et qui palpite,
J'arracherai ce cœur tout rouge de son sein,
Et, pour rassasier ma bête favorite,
52 Je le lui jetterai par terre avec dédain ![27] »

「この不敬虔ないたずらにも退屈した時には、彼の身に、私のほっそりした強い手を押し当てましょう。すると私の爪は、鷲女神(ハイピュイア)の爪のように、彼の心臓まで、見事に食い入ってゆくでしょう」（v.45-48）。「ぴくぴくと震えるほんの幼い小鳥のように、この真っ赤な心臓を、私は彼の胸から抉り出し、私のお気に入りの獣のご馳走にと、蔑(さげす)みをもって地べたに投げてやりましょう」（v.49-52）。鷲女神は、ヘシオドスの『神統記』に出ている怪物であるが、『悪の花注釈』（杉本秀太郎）は、「ハイピュイアは三頭で一族をなし、突風のように早い飛翔力をそなえ、姿は見えにくい。大鷲の翼を持ちながら、顔つきはなお人間の女のおもかげをとどめ、好んで子供を誘拐し、また死者の魂を持ち去って室(むろ)に貯えることをする」[28]と説明した後、「「詩人」の妻がここにハイピュイアという

怪物を喩えに用いるのは、「詩人」屠殺の場面に殊更に異教性を与え、広場にむらがっているキリスト教徒たちの偽善的な心理を逆撫でしたいからである」[29] と注釈する。何人かの批評家は、この妻が、ほとんど終生腐れ縁として関係の続いた現実の恋人 Jeanne DUVAL を想起させると述べているが、J.-D. HUBERT はこの妻の反＝宗教的態度を指摘し、「「ぴくぴくと震えるほんの幼い小鳥」のイマージュは、非常な陽気さを示していた、冒頭の鳥を恐らく思い出させる、しかしこの心臓が真っ赤であるという事実は、漠然と、イエスの聖心 Sacré Cœur を暗示する」[30] と解釈している。詩人=イエス・キリストの十字架の道という図式が再度暗示されているのである。

こうして「十字架の道」を歩むことを余儀なくされた詩人は、自己の真の使命を知っている。しかしそれは「苦痛主義」dolorisme と呼ぶべきものである。

—— « Soyez béni, mon Dieu, qui donnez la souffrance
Comme un divin remède à nos impuretés
Et comme la meilleure et la plus essence
60 Qui prépare les forts aux saintes voluptés[31] !

「讃えられてあれ、わが神よ、あなたが苦患を与えたまうのは、われらの穢(けが)れのもろものを癒す霊薬として、また、強き者たちを、神聖な逸楽へと準備する、こよなく優れて純粋な精髄(エッセンス)としてなのですから」(v.57-60)。弱く、苦難を受けた者が逆説的に神を祝福する例としては、旧約聖書の『ヨブ記』が典型的であるが、これまで malédiction の対象であった詩人は「呪われた者」maudit であるが故こそ神を「祝福する」bénir する資格を持つ。詩人が天国で味あうであろう「神聖な逸楽」とは超自然的なものであり、詩人には天の座に「神聖な〈軍団〉をなす至福者の隊列の中に」、「〈座天使(トローヌ)〉、〈力天使(ヴェルテュ)〉、〈主天使(ドミナシオン)〉らの永遠の祝祭へと」招かれているが、それを受ける資格としての「霊薬」こそが地

上の「苦痛」であるにほかならない。

« Je sais que la douleur est la noblesse unique
Où ne mordront jamais la terre et les enfers,
Et qu'il faut pour tresser ma couronne mystique
68 Imposer tous les temps et tous les univers.[32)]

「私は知っております、苦痛こそは唯一なる高貴のしるし、地上も冥府もこれには指一本触れることができず、また、私の神秘な王冠を編もうとすれば、すべての時代、すべての世界から、貢（みつぎ）を取り立てねばならぬことを」（v.65-68）。この「苦痛こそは唯一なる高貴のしるし」と宣言する BAUDELAIRE の dolorisme について、阿部良雄は「douleur（苦痛、苦悩）こそは人間を穢れから浄めるものであり、苦しむことは選ばれあることだという思念は前々節から引き継がれて、やがて「燈台」結論部で苦しみの表現こそは人間の尊厳の証しであるという思想に発展して、『悪の華』を貫く倫理的骨格をなす」[33)] と述べる。このように BAUDELAIRE の dolorisme は詩人の実存的投企として選び取られたものなのであり、この dolorisme ゆえに BAUDELAIRE の生は spleen に満ちたものにならざるを得なかったのは当然のことであったのである。

II

このように BAUDELAIRE の spleen は宗教的・形而上学的理由に由るものであるが、また現実生活に起源を持つことも明白である。成人して 21 歳の時亡き父親 François の財産の相続分を受け取った BAUDELAIRE は、物質的にも精神的にもダンディとして生きることを理想とし、豪奢と放蕩に生きたが、彼のあまりの金銭的放縦さを心配した彼の家族は、裁判所の決定によって彼を準禁

治産者とし、法廷後見人を付けその資産を僅かな年金のかたちでしか受け取ることができないようにした。この決定が BAUDELAIRE に深い心的傷(トラウマ)を残したことは良く知られているが、そのせいで彼は終生金銭的不如意に苦しむことになった。それ以後 BAUDELAIRE は貧困の中に生き、「アルバイトで収入を増やす」ため、とりわけ芸術批評を書くことによって糊口をしのがなくてはならなくなるだろう。それは結果的には BAUDELAIRE に « Salon de 1846 » や « Salon de 1859 » などの傑作美術批評作品を書くことを可能にし、BAUDELAIRE を詩人であるばかりでなく偉大な美術批評家として後世に知らしめることになったが、こうした貧困の中で生きなければならない状況を彼は *La Muse vénale* の中で自己を「金で身を売る美神(ミューズ)」に託してこう嘆いている。

Ô muse de mon cœur, amante des palais,
Auras-tu, quand Janvier lâchera ses Borées,
Durant les noirs ennuis des neigeuses soirées,
4 Un tison pour chauffer tes deux pieds violets?

Ranimeras-tu donc tes épaules marbrées
Aux nocturnes rayons qui percent les volets?
Sentant ta bourse à sec autant que ton palais,
8 Récolteras-tu l'or des voûtes azurées[34)]?

「おおわが心の美神(ミューズ)よ、御殿暮しの大好きなきみだが、やがて〈一月〉がその〈北風(ボレアース)〉たちを野に放つ時、雪降る夜な夜なの真黒な倦怠(エンニュイ)の続く間、紫色になった足を暖めるのに、燃えさし位はあるのだろうか？せめては、鎧戸(よろいど)ごしにもれてくる、夜の光に、大理石まだらのその肩を、生き返らせてもらうつもりか？口も財布も、すっからかんに干上がって、紺碧の丸天井から、星の黄金(きん)でも刈

り取るつもりか？」(v.1-8)。ここでは美神(ミューズ)すなわち詩人であり、「宮殿」は屋根裏部屋であり、貧窮に苦しむ BAUDELAIRE の姿を彷彿とさせる描写である。この複数形の les ennuis について『悪の花注釈』（西川長夫）は「この ennuis は ennui という語のもっている意味のあらゆるひろがりを含むものとして、すなわち金銭的な不如意から、深淵の感情につながる精神的な倦怠[例えば「憑かれた男」（XXXVII）における gouffre de l'Ennui、「功徳」（XLIV）において l'angoisse, la honte, les remords, les sanglots（苦しみ、恥辱、悔恨、咽び泣き）などとともに列挙された les ennuis]を含むものとして考えられよう」[35] と注釈しているが、まさに詩人のすべての苦悩を凝縮したものであろう。こうして詩人＝美神(ミューズ)は大理石の御殿に住むどころか、火の気のない屋根裏部屋で寒さに震えて、その肩は冷たさでまだらになるほどである。

Il te faut, pour gagner ton pain de chaque soir,
Comme un enfant de chœur, jouer de l'ensensoir,
11 Chanter de *Te Deum* auxquels tu ne crois guère,

Ou, saltimbanque à jeun, étaler tes appas
Et ton rire trempé de pleurs qu'on ne vois pas,
14 Pour faire épanouir la rate de vulgaire.[36]

「毎晩食べるパンを稼ぐためには、否応なく、きみも聖歌隊の子供のように、香炉を振ったり、心にもない讃歌(テ・デウム)を歌ったりせねばならぬ、あるいは、すきっ腹の大道芸人よろしく、きみが媚態をさらし、こっそり流す涙に濡れた作り笑いを振りまけば、俗衆どもは、腹の皮をよじって高笑い」(v.9-14)。詩人はジャーナリスムの中で生きてゆくために、気にもそまない文章を書き、売文によって日々の糧を稼いでいかなければならない。そうした自分に対する BAUDELAIRE

の自嘲の声が聞こえてきそうである。現実に、第二帝政期における言論出版の統制の強化は詩人の生存の意識を脅(おびや)かしたことは、次のような彼の手紙の一節によって知ることができる。

> 今しがた「報知」紙の、内務大臣の報告の次に、雑誌と新聞を一つずつ（「パリ評論」と「目撃者」紙）を発行差し止めにする皇帝勅令を見つけたところです。私の手紙の初めからのこうした数行は、母上には奇怪なものと見えるかも知れませんし、実際、およそ浮世の懸念から離れてひとりぼっちで暮らしておられる母上は、世に数ある重大事に疎くていらしゃるに違いありません。しかしこれは、昨日までの一時期よりさらに一段と自由に欠けた新しい時期の発端にほかならないのではないかと、私はひどく心配しています。皇帝のチュイルリーでの演説はたいそう刺激的でした。官吏たち（モルニー、トロロン、バローシュ）の演説は居丈高でした。新聞が廃棄処分にあい、劇場や書店に検閲が課されるなら、我々はどうやって生きるのでしょう?[37]（1858 年 1 月 20 日、AUPICK 夫人宛）

しかし「香炉を振ったり、心にもない讃歌(テ・デウム)を歌ったりせねばならぬ」という言い回しの内に、必ずしも権力者やブルジョオワジー、あるいは卑属な大衆に迎合すだけではない詩人のイロニーが伺われる。J.-D. HUBERT はその二義性を指摘して次のように記している。「香炉を振るは二義に解釈される。すなわち美神(ミューズ)は聖歌隊の子供のように香炉を振る――美神(ミューズ)はブルジョワを嘲笑する。美神(ミューズ)が歌わなければならない讃歌(テ・デウム)は、勝ち誇ったブルジョワを祝って歌われる――美神(ミューズ)はそれゆえ必ずしもそれを信じていない」[38]。腹をすかせた「大道芸人」は後に書かれる散文詩 *Le vieux Saltimbanque* を思い起こさせる。そこでは老いた「大道芸人」は、祭りに浮かれ騒ぐ大衆に見捨てられ、嘲弄されながら老いの孤独のなかでうらぶれて生きるしかない姿で描かれている。

Au bout, à l'extrême bout de la rangée de baraques, comme si, honteux, il s'était exilé lui-même de toutes ces splendeurs, je vis un pauvre saltimbanque, voûté, caduc, décrépit, une ruine d'homme, adossé contre un des poteaux de sa cahute; une cahute plus misérable que celle du sauvage le plus abruti, et dont deux bouts de chandelles, coulants et fumants, éclairaient trop bien encore la détresse.[39)]

「その端、掛け小屋の並びのいちばん端に、まるで恥ずかしくなってこういう輝かしいもののすべてからわれとわが身を追放したかのように、一人の哀れな大道芸人が、腰は曲がり、老衰し、よぼよぼになって、人間の廃墟さながら、自分の小屋の柱に背をもたせかけているのを、私は見た。この上もなく蒙昧（もうまい）な蛮人の小屋よりも惨（みじ）めな小屋、その悲惨をさらに、流れて燻（いぶ）る二本の蝋燭の端切れが、あまりにもはっきりと照らし出していた」。彼は、笑いも忘れ、「泣いても、踊ってもいなかったし、身振り手振りも見せず、叫び声も立てなかった。陽気な歌も哀れっぽい歌も、なにひとつ歌いはしなかったし、憐れみを乞いもしなかった。黙りこくって、じっと動かずにいた。断念してしまい、投げ出してしまっていたのだ。彼の運命はもう定まっていた」[40)]。勿論、この「大道芸人」は、早期に老いた詩人の落ちぶれた姿のことに他ならない。

Et, m'en retournant, obsédé par cette vision, je cherchai à analyser ma soudaine douleur, et je me dis : Je viens de voir l'image du vieil homme de lettres qui a survécu à la génération dont il fut le brillant amuseur; du viex poète sans amis, sans famille, sans enfants, dégradé par sa misère et par l'ingratitude publique, et dans la baraque de qui le monde oublieux ne veut plus entrer![41)]

「そして、その場を立ち去りながらも、この光景にとり憑かれた私は、突然私を襲った苦痛を分析しようと努めて、こう考えた――私の見てきたものは、自分がその華々しい楽しませ役をつとめた世代の後まで生き延びてしまった老文学者の影像(すがた)、また、自らの貧困と公衆の忘恩のゆえに落ちぶれて、その掛け小屋に忘れっぽい世間の者たちがもはやはいろうともせぬ、友も家族も子供もない老詩人の影像(すがた)だったのだと！」。

現実生活において BAUDELAIRE を苦しめたものは貧困だけではない。病気もその大きな原因であった。BAUDELAIRE はいたるところで精神的・肉体的不調を訴えているが、例えば次のような手紙の一節はそれを具体的に示している。

> しかしまた私は、かつてこんなにひどく落ち込んだことも、こんなに長く倦怠(アンニュイ)の中にぐずぐずしていたことも、覚えがありません。それにまた加えてみていただきたい、私の貧しさからくる恒久的な絶望、古い負債によって余儀なくされる、様々な面倒と、仕事の中断（安心なさって下さい、これは、母上の弱気に訴える油断ならぬ呼び掛けではありません。**いくつもの理由からして**まだその時機ではありません、その主な理由というのは、自分でも正直に認めているこの弱気とこの怠惰なのです）、私の精神面での栄誉ある立場と、この不安定で悲惨な生活との、屈辱的な、厭(いま)わしい対照、そして最後に、言ってしまえば、一ヶ月前から続いている、奇妙な息苦しさと、腸や胃の障害、といったものを。何を食べても息苦しくなり、疝痛が起こります。精神的なものが肉体的なものを治すのであれば、猛烈で継続的な仕事が私を治すでありましょうが、その場合も衰弱した意思をもって意欲することが必要になります。――悪循環[42]。（1857 年 12 月 30 日、AUPICK 夫人宛）

BAUDELAIRE は別の手紙の中に「かつてもし、医学の関わり得るところではなくて病気だった男ありとすれば、それはまさしく私です」[43]（1857 年 12 月 25

日、AUPICK 夫人宛）と記しているが、こうした困難が彼の spleen の原因であるのか、あるいは spleen がその原因であるのか言うことは非常に困難である。器質的障害と心的現象は相互に緊密に結びついており、純粋に肉体的な問題が心的障害を引き起こすこともあれば、またその反対に心的障害が肉体的困難を引き起こすこともありうるだろう。BAUDEALIRE 自身、上に引いた手紙の中で「病める肉体が精神と意志をとを減退させるのか、それとも精神的な怯懦（きょうだ）が身体を疲れさせるのか、まったく分かりません」[44] と述べているが、まさに「悪循環」である。要するにこうした病的状態が、物質的貧困とともに BAUDELAIRE の spleen の偶発的な原因であったことは間違いない。詩人は *La Muse malade* という十四行詩（ソネ）の中で、その悪い健康を「病める美神（ミューズ）」に託して苦々しく嘆く。

Ma pauvre muse, hélas! qu'as-tu donc ce matin?
Tes yeux creux sont peuplés de visions nocturnes,
Et je vois tour à tour réfléchis sur ton teint
4 La folie et l'horreur, froides et taciturnes.

Le succube verdâtre et le rose lutin
T'ont-ils versé la peur et l'amour de leurs urnes?
Le cauchemar, d'un poing despotique et mutin,
8 T'a-t-il noyée au fond d'un fabuleux Minturnes[45]?

「私のあわれな美神（ミューズ）よ、おお！今朝はどうしたというのだ？落ち窪んだきみの眼には、夜の幻が蠢（うごめ）いて、きみの顔色に、かわるがわる、映されるものは、ひんやりとして口も利かぬ、狂気、そして戦慄（おののき）」（v.1-4）。ロマン派の時代であれば詩人・芸術家に「霊感を与えてくれる女神」であるミューズも、

BAUDELAIRE にあっては「病める時代、金銭づくの時代に超然としてはいられず、その中で傷つき妥協し苦しむミューズである」[46] (阿部良雄)。「緑がかった淫らな魔女や、薔薇色の妖精が、彼らの壺から、恐怖と情欲をきみにそそいだのか？悪夢が、有無を言わせぬ手ごわい拳(こぶし)を振るって、伝説に聞くミントゥルナエの沼底へ、きみを溺れさせたのか？」(v.5-8)。「ミントゥルナエの沼」とは、「ローマの将軍ガイウス・マリウスが追手を逃れるためにローマ市南方ミントゥルナエの沼に口までつかったという故事」[47] による。ここでは「悪夢」は擬人化されており、不眠に苦しんだ BAUDELAIRE の悩みが知れる。

Je voudrais qu'exhalant l'odeur de la santé
Ton sein de pensers forts fût toujours fréquenté,
11 Et que ton sang chrétien coulât à flots rythmiques,

Comme les sons nombreux des syllabes antiques,
Où règnent tour à tour le père des chansons,
14 Phœbus, et le grand Pan, le seigneur des moissons.[48]

「願わくは、きみの胸が、健康の匂いを漂(ただよ)わせつつ、常に力強い思念の訪れるところとなりますように、きみの、キリスト教徒の血が、律動(リズム)の脈打って流れますように、歌の父太陽神(フォイボス)と、収穫を統べる王、偉大な牧神(パン)とが、かわるがわる君臨する、古代の世の歌の拍子よい調べにも似て」(v.9-14)。Mario RICHTER はここで詩人は二つの願望を述べていると言う、すなわち「1．美神(ミューズ)の胸が健康と力を明らかにすること。2．美神(ミューズ)のキリスト教の血が、異教の古代の時代のそれに似た律動(リズム)に従って流れること」[49] である。詩篇 *J'aime le souvenir de ces époques nus*[50] が表明していたように、キリスト教が罪の観念をもちこむ以前の異教の古代にこそ、本来的な「健康」があったのであるから、

「キリスト教徒の血」が流れるミューズは、「病気のミューズ」である。それなのに詩人は「太陽神」や「牧神」のような健康な霊感をもたらすよう、「ないものねだり」[51]（阿部良雄）の矛盾した要求を投げかける。

BAUDELAIRE の spleen の原因となった肉体的困難、病気の中で中心的位置を占めるのは、恐らく「黴毒」syphilis であったであろうことは確かである。若い頃の放蕩生活において罹患したとされるこの病気は生涯にわたって間歇的に彼を苦しめたが、1862 年 1 月 24 日頃の SAINTE-BEUVE 宛の手紙の中で、「大きな悲しみ、仕事することの必要、古傷から来る肉体的苦痛が私の活動を中断しました」[52] と書いているが、この「古傷から来る肉体的苦痛」が黴毒の再発を婉曲的に述べているとされる。それは 同じ時期に書かれた « Fusées » 16 の次のようなよく知られた、悲痛な決定的記述と一致するものである。

> 私は快感と恐怖をおぼえながら自分のヒステリーを培（つちか）ってきた。今では絶えず眩暈（めまい）がするし、今日、1862 年 1 月 23 日、私は奇妙な警告を受けた、痴呆の翼の風が身の上を吹き過ぎるのを感じた。[53]

註

使用テキスト：BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude PICHOIS, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols. 以下 *O.C.*, t. I , t. II と略記。BAUDELAIRE 詩の訳は阿部良雄訳を使用しているが、適宜変更している。

1）阿部良雄訳註「ボードレール全集 I 」、筑摩書房、1983、p .465

2）*Ibid.*

3）*O.C.*, t. I , p.75

4）*Les Sept Vieillards, O.C.*, t. I , p.87

5）Jean Pierre RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955, p.158

6）Jean Paul SARTRE , *Baudelaire*, Gallimard, 1947, p.172

7）*O.C.*, t. I , p.88

8）J.-D. HUBERT , *L'Esthétique des"Fleurs du Mal"*, P.Callier, 1953, p.102

9）拙論「BAUDELAIRE の〈spleen〉の形象――空間篇」、福岡大学人文論叢第 39 巻第 2 号、2007

10）拙論「BAUDELAIRE の〈spleen〉の形象――時間篇」、福岡大学人文論叢第 40 巻第 2 号、2008

11）*O.C.*, t. I , p.7

12）*Ibid.*

13）阿部良雄、*op.cit.*,p.466

14）J.-D. HUBERT ,*op.cit.*, p. 222

15）「女にはこう仰せられた「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる」」。聖書、日本聖書刊行会、1973

16）阿部良雄、*op.cit.*, p.466

17）*O.C.*,t. I , p.7

18）阿部良雄、*op.cit.*,p.466

19）BAUDELAIRE, *Correspondance*, t. I , p.327

20）BAUDELAIRE, *Correspondance*, t. II , p.552-553

21）*O.C.*, t. I , p.7

22）阿部良雄、*op.cit.*, p.466

23）*O.C.*, t. I , p.8

24）*Ibid.*, p.10

25）*Ibid.*, p.8

26）*Ibid.*

27）*Ibid.*

28）多田道太郎編「悪の花注釈」平凡社、1988、p.31

29）*Ibid.*

30）J.-D. HUBERT, *op.cit.*, p.225

31）*O.C.*, t. I , p.9

32）*Ibid.*

33）阿部良雄、*op.cit.*, p.467

Cf. Ces malédictions, ces blasphèmes, ces plaintes,
Ces extases, ces cris, ces pleurs, ces *Te Deum*,
Sont un écho redit par mille labyrinthes;
36 C'est pour les cœurs mortels un divin opium!

C'est un cris répété par mille sentineles,
Un ordre renvoyé par mille porte-voix;
C'est un phare allumé sur mille citadelles,
40 Un appel de chasseurs perdus dans les grands bois!

Car c'est vraiment, Seigneur, le meilleur témoinage
Que nous puissions donner de notre dignité
Que cet ardent sanglot qui roule d'âge en âge
44 Et vient mourir au bord de votre éternité!
これらの呪詛（のろい）、これらの冒瀆（ののしり）、これらの嘆き、
これらの法悦、叫び、涙、これらの讃歌（テ・デウム）は、
無数の迷宮を通って次々に響く一つの木霊（こだま）、

死すべき定めの人間に与えられた、神の阿片！

それは、無数の歩哨の繰り返し伝える一つの叫び、
無数の伝送管(メガフォン)で送りつがれる一つの命令。
それは、無数の城砦(とりで)の上に点(とも)された一つの燈台、
大きな森に踏み入った狩人たちの呼び声！

なぜならば、主よ、これこそはまさに、自らの尊厳を
私たちが示すための、こよなき証左(あかし)なのですから、
世から世へと流れては、あなたの永遠の岸辺に
辿り着いて息絶える、この熱烈な咽(むせ)び泣きこそは！
（*Les Phares, O.C.*,t. I , p.14）

34）*O.C.*, t. I , p.15

35）多田道太郎編「悪の花注釈」平凡社、1988、p.115

36）*O.C.*, t. I , p.15

37）BAUDELAIRE, *Correspondance*, t. I , p.447

38）J.-D. HUBERT ,*op.cit.*, p.57

39）*O.C.*, t. I , p.296

40）*Ibid.*

41）*O.C.*, t. I , p.297

42）BAUDELAIRE, *Correspondance*, t. I , p.438

43）*Ibid.* P.437

44）*Ibid.*

45）*O.C.*, t. I , p.14

46）阿部良雄、*op.cit.*, p.480

47）*Ibid.* P.481

48）*O.C.*, t. I , p.14-15

49）Mario RICHTER, *BAUDELAIRE, Les Fleurs du Mal, Lecture intégrale*, Slatkine, 2001, t. I ., p.92

50）Cf. J'aime le souvenir de ces époques nues,
Dont Phœbus se plaisait à dorer les statues.
Alors l'homme et la femme en leur agilité
Jouissaient sans mensonge et sans anxiété,
5 Et, le ciel amoureux leur caressant l'échine,
Exerçaient la santé de leur noble machine,
Cybère alors, fertile en produits généreux,
Ne trouvait point ses fils un poids trop onéreux,
Mais, louve au cœur gonflé de tendresses communes,
10 Abreuvait l'univers à ses tétines brunes.
L'homme, élégant, robuste et fort, avait le droit
D'être fier des beautés qui le nommaient leur roi;
Fruits purs de tout outrage et vierges de gerçures,
Dont la chair lisse et ferme appelait les morsures!
あれら裸の時代の思い出を私は愛する、
その石像を、〈太陽神（フォイボス）〉は好んで金色に染めたものだ。
男も女も、その頃は、身のこなしも敏捷に、
偽りもなく、不安もなしに、愉（たの）しんでいたし、
恋心あふれる大空は、彼らの背骨を愛撫してくれ、
気高い身体器官を鍛（きた）えてくれるのだった。
〈大地（キュベレー）の女神〉もその頃は、豊饒に作物を恵み、
わが子らのあまりに重い荷と思うどころではなく、
平等無差別の情愛に心ふくれた牝狼よろしく、

褐色の乳房で、全宇宙を潤していた。
姿よく、逞しく力強い男性は、当然の権利をもって、
彼を王と呼ぶ美女たちを誇りにしていた。
いささかの辱めも受けず、ひび割れ一つの穢れもない果実(このみ)、
女たちの滑らかで緊(しま)った肉は、噛みたい気持ちを唆(そそ)るのだった。
（*O.C.*, t. Ⅰ ,p.11-12）

51）阿部良雄、*op.cit.*, p.481

52）BAUDELAIRE, *Correspondance*, t. Ⅱ , p.220

53）*O.C.*, t. Ⅰ , p.668

参考文献

BAUDELAIRE , *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols.

BAUDELAIRE , *Les Fleurs du Mal*, p.Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, 1942.

BAUDELAIRE , *Les Fleurs du Mal*, p.Antoine Adam, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1961.

BAUDELAIRE, *Petits Poëmes en prose*, p.Robert Kopp, José Corti, 1969.

BAUDELAIRE , *Petits Poèmes en prose*, p.Henri Lemaître, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1962.

Robert Benoix CHÉRIX, *Commentaires des"Fleurs du Mal"*, Droz, 1962.

René GALAND , *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969.

J.-D. HUBERT , *L'Esthétique des"Fleurs du Mal"*, P.Callier, 1953.

Jean PRÉVOST, *Baudelaire, essai sur l'inspiration et la création poétique*, Mercure de France, 1964.

Jean Pierre RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

Mario RICHTER, *Baudelaire*, *Les Fleurs du Mal, Lecture intégrale*, Slatkine, 2vols, 2001

Jean Paul SARTRE , *Baudelaire,* Gallimard, 1947.

阿部良雄訳註『ボードレール全集Ⅰ－Ⅵ』, 筑摩書房, 1983-1993.

多田道太郎編『悪の花注釈』, 平凡社, 1988